

# ソウル大学図書館蔵・奈良絵本『秋の夜の長物語』

## — 翻刻および紹介 —

内田 康

『秋夜長物語』は、稚児と僧侶の恋愛に山門と寺門の抗争や、瞻西上人の発心譚を絡ませた、いわゆる児物語の代表作であり、室町時代物語中でも秀作の誉れが高い。岩波(旧)日本古典文学大系『御伽草子』の底本となった永和本の存在から、その成立は南北朝時代以前に溯ることが知られる。伝本も多く、すでに平沢五郎氏による詳細な研究・紹介<sup>1)</sup>や、室町時代物語大成(一)および補遺(一)などで、代表的諸本を目にすることができる。

本稿で紹介するのは、韓国・ソウル大学校中央図書館の所蔵する、奈良絵本『秋の夜の長物語』である。本作品の奈良絵本としては、従来、平沢氏の論考<sup>2)</sup>によって、武田祐吉博士旧蔵本の存在が知られていた<sup>3)</sup>。武田博士旧蔵本は、原本が戦災で焼失し、平沢氏も、引用は横山重氏の副本に拠っている。平沢氏によれば同本の本文は、「流布本系に比し、著しく委細な一面をもつてゐる。がこの増補の部分を見るに、古写本系のそれとも異なっており、又、他にかゝる類例を見出し得ず、本書特有なものであるが、それなりに後人のさかしらになるところの本物語の近世化、或通俗化の跡を示すが如くにも思はれる」とのことである。一方ソウル大本は、後述するように、明らかに武田博

士旧蔵本とは系統を異にしており、その点で興味深いものと言える。なお同本は、一九八四年にマイクロ化されており、その複製は東京の国文学研究資料館でも閲覧のみであるが、研究上の便宜を考え、ソウル大学校中央図書館の許可を得て、ここに翻刻するものである。

まず、同本の体裁を記す。

- ・奈良絵本、一冊。(三二〇二一)。
- ・装幀、横本、鳥の子紙袋綴。竪一七・五糎、横二五・五糎。
- ・丁数、全三十三丁。内、第一丁および第三十二、三十三丁は白紙。
- ・本文、竪約一四糎、横約二〇糎。各頁ほぼ十二行。但し、絵の直前および最終丁は、六行から十三行までと、やや変則的になっている。
- ・表紙、裏表紙とも、藍地に金泥で松の木が描かれている。見返しは空押し金紙。
- ・題簽、なし。但し、表紙中央部に貼られていた痕跡あり。
- ・内題、なし。

・蔵書印、第二丁裏中央に、「京城帝國大學圖書館」の押印あり。  
・挿絵、全十頁。但し、30ウと31オは一続きにつき（絵 9・a）（絵 9・b）とした。また絵の紙背には、「秋の夜 上巻」などの書入がある。

①・6オ、②・10オ、③・14オ、④・16オ、⑤・19オ、⑥・21ウ、⑦・23ウ、⑧・26オ、⑨a・30ウ、⑨b・31オ。

赤、緑、金などで彩色が施されており、保存状態はきわめてよい。

同本は題籤および内題を欠いているため、以下、便宜的にソウル大学図書館の分類目録に従い、『秋の夜の長物語』と呼ぶことにする。同本の本文は、「たうそくなんによ、そのかすありとおほへて、た、なくこゑのみそ聞へける」という文で終わっている。これは、例えば永和本（大系本）で言えば、序から第廿四までの各段のうち、第十二の末尾に相当する。分量的に見て、また挿絵の紙背にある書入から考えても、同本は元来、上下二冊本であつたに違いない。しかるに武田博士旧蔵本の場合、上中下の三冊本であり、巻分次第は平沢氏によれば、

上巻は「ふけすきて、人めつゝみて、これへ、しのひやかに、いらせ給はんと、おほせらるゝよし申て、いそかはしけにそ、かへりける」で終り、

中巻は「さるほとに、りつし、たゝいまのつかひを、きくよりも、心うかれ、玉しゐみたれて」に始り、「しやくまくの、こけのしづくに、袖ぬれて、なみたの雨の、かはくまそ、な

かりける」で終る。

下巻は、「かゝりける所に、あはちの国の、ものなりとて、八十はかりなるおきな、ひんはつしろく、やせたりけるを」より起つてゐる。

由である。この上巻と中巻の巻分によると、上巻の最終部は二十六丁（裏は挿絵）であるが、これはソウル大本では二十一丁（裏は（絵 6））に相当する。奈良絵本としての体裁にさほど差異がないにもかかわらず、これほど分量が異なっているのは、武田博士旧蔵本が大幅に増補された本文を有したテキストであることによるものであろう。なお、残念ながら、ソウル大学図書館が所蔵する奈良絵本『秋の夜の長物語』は一冊のみであり、後半を欠いた零本ということになる。

次に本文について述べる。平沢氏によれば、本作品の本文系統のうち流布本系は、慶長元和頃の印行と見られる平仮名古活字十一行本や同十二行本を祖とする類とすることであるが、これらの古活字版が直接の親ではないにしろ、これと、寛永版本以下の整版本とを同系統とみなす点に関しては、ほぼ異論の余地はないものと思われる。これに対して武田博士旧蔵奈良絵本は、他本に比して、本文が著しく詳細になつている。詳しくは、平仮名古活字十一行本と比較した平沢氏の論考に譲るが、一例をあげれば次のごとくである。

たうしんけんこ、そくせう無しやうほだい、とそいのりける。まことにしゆせうなる御事にてこそ侍りけるとて、人々

ふしきにおもふなり。すてに七日にまんしける夜、

(傍点部、古活字版になし。なお句読点は私に施した。)

一方ソウル大本においては、翻刻からも明らかかなように、若干の漢字や仮名遣いおよび濁点の有無を除いて、古活字版との異同は見られない。(「たうしんけんこ、そくせうむしやうほたひ、とそいのりける。七日まんしける夜、」(5オ)参考のために、本翻刻でも、室町時代物語大成所収の平仮名古活字十一行本との校異を示しておいた。さらに、本稿では紙数の関係上触れ得なかつたが、平沢氏の、寛永十九年安田十兵衛版との校異を示した平仮名古活字十一行本の翻刻をも合わせ見れば、ソウル大本の、平仮名古活字版との近接性がより鮮明になろう。それは、同本の製作された時期を明確にしうる内部徴証とまではなり得ないものの、「近世化、或通俗化の跡を示す」とされる武田博士旧蔵本と比べて、その、中世末期の香りをより多く残したテキストであることを物語るものである。

以上のように、ソウル大学図書館蔵・奈良絵本『秋の夜の長物語』は、武田博士旧蔵奈良絵本と大きく異なり、その本文は流布本系のなかでも最も古い平仮名古活字版と甚だ近いものであつて、この点自体は特に新しい問題を提起するわけではないのであるが、唯一箇所、同本が、平仮名古活字版はもとより、その他の諸本にも見られない興味深い記事を有している部分を指摘して、結びとしたい。それは、この作品に描かれた時代背景の設定に関わる記述である。

現存諸本の中で最も古い奥書を付す永和本は、物語の背景をい

つの時代のこととも記していないが、幸節本は「一条院の御宇」とし、それ以外のほとんどの諸本(文禄本、天文本、片仮名古活字本、平仮名古活字本、寛永刊本、正徳刊本など)が、「後堀河院の御宇」としている。この作品がもとより虚構であるにせよ、勅撰集においては『詞花集』初出歌人で、藤原基俊らとも親交のあつた瞻西上人が、後堀河院の時代の人であるというのには、いかにも不自然な設定である。鷲尾順敬氏は、これを「堀河院」の誤写であると見、また後藤丹治氏は、鷲尾説を「面白考へ」としながらも、「何れの傳本にも「堀河院」と書き奉つたものはないから、今はもとのまゝに「後堀河院」とある本文に従つて説を立て、置く」とされた。ところがこのソウル大本は、問題の箇所を「かのほり川の院の御宇に(3オ)」としているのである。もちろん、このことをもつてソウル大本が本来的な形のテキストであるなどと言うことはできないし、むしろ逆に、「後堀河院」とするテキストの多さが、同本の改訂の跡を物語っているとも言えよう。が、ともあれこの点から、時代設定の整合性を保つたテキストとして、零本ながらも、同本のささやかな独自性を指摘することが可能であるかと思われる。

註

- (1) 平沢五郎氏「秋乃夜長物語―伝本解題並びに翻印四種―」(『斯道文庫論集』1、一九六二・三)、「秋乃夜長物語(統)―伝本解題並びに翻印三種―」(同誌2、一九六三・三)、「秋夜長物語攷」(同誌3、一九六四・三)。  
(2) 同本の存在については、すでに以下の文献に言及がある。鳥居フミ子氏「ソウル大学中央図書館所蔵図書調査目録」(『実践女子大学文学部紀要』19、一九七七・三)、須田悦生氏「大韓民国国立ソウル大学校図書館蔵日本古

典籍目録」(静岡女子短期大学・国語国文学資料集1、一九八二・一二二)、今井源衛氏「ソウルの日本古典文学書」(『日本古典文学会々報』一一八、一九九〇・七)。

(3) 平沢氏、註(1)論文(二九六二)。本稿は、特に氏のこの御論考における成果に負うところが大きい。以下に引用した氏の論証部分は、すべて当該論文によるものである。

(4) この点については、須田悦生氏も、註(2)の目録において、「本文平仮名活字体に極めて近似する」とされている。

(5) 但し文禄本は、「後堀川」の横に「二条院イ」の注記がある。

(6) 鷲尾順敬氏「瞻西の説経教化」(『日本仏教文化史研究』富山房、一九三八・四)。

(7) 後藤丹治氏「児物語の研究」(『中世国文学研究』(磯部甲陽堂、一九四三・五)第五章、第一節「秋の夜の長物語」。

### 〔凡例〕

- 以下は、ソウル大学図書館蔵・奈良絵本『秋の夜の長物語』(題簽・内題なし。書名は、同図書館の分類目録による)を翻刻し、平仮名古活字十一行本(慶應義塾大学蔵。室町時代物語大成・一所収)との校異を示したものである。
  - 句読点は、私に施した。なお、原本に濁点はない。
  - 古活字本との校異において、漢字の当て方の差異や濁点の有無は、基本的に無視した。
- 本文中、一箇所だけ「御坊」(10ウ)とある振り仮名は、底本のままである。

### 【翻刻】

それ、春の花のしゆとうにのほるハ、しやうくほたひのきをすすめ、あきの月のすいてにくたるハ、け、しゆしやうのさうをあらハす。天いふ事なくしてハ、ふつとみなこれをしめす。人心有してハ、あにつとめきらんや。もしひとありて、人間の八くをミテ多(ま)いとをいとふときハ、ほんなうすなハちほたひとなる。天上の五すいをき、て、しやうとをもとむる時ハ、しやうしすなハちねはん(2オ)となる。しかるゆへに、しよふつほさつ、しゆんきやくのけたうをたる、日、つみあるをは、しやよりしやうとに入、えんなきをハ、あくよりせんにおもむかしめ給ふ。なにもつていふそなれハ、きやうろんのしよせつ、しよてんにのするところしけれハ、申にことはたらす。ちかころ、み、にふれ、事のあまりにあハれにもたつとかりしかハ、めんく(ま)にまくらをそハた(2ウ)て給ひて、おひのねさめに、あきの夜のなか物かたり、ひとつ申侍らん。

かのほり川の院の御宇に、にしやまのせんさい上人とて、たうかくけんひしたりし人、もとハ、ほくれいとうたうのしゆとに、くはんかくるんのさいしやうのりつし、けいかいといふ人にてそおハしける。うちには、きよくせんのなかれおくんて、四けふ三くはんのつきをすまし、外に(3オ)ハ、くハうせきかみちをふみて、なうさはいすいの風をか、けたり。ある時ハ、にんにくのころもの袖に、せつしゆのしひをつ、ミ、あるときハ、さいふくのつるきのやきはのうへに、ふんぬのゆへい(ふんぬ)をふるふ。まことに、しんそくのいるい、ふんふのたつしやなり。けいね

んのころ、はなのちるはるのくれをみて、ねぬよの夢やさめた  
りけん、こハ、そもなに事そや、われ(こゝ)、たま(こゝ)、そくちん  
の「(3ウ)きやうかいをはなれて、しやくしのもんしつに入な  
から、あけくれは、た、ミやうもんりやうにのミして、しゆつ  
り(しやくしの)のつとめにおこたりぬる、あさましかりける事かな、  
と思ふこ、ろいてきにけれハ、やかて、山より山のおくおもた  
つね、しハのいほりの、しはしはかりのかくれかをもむすハ、  
や、とおもひけるか、さすかに、ふるきえんのつなく所ハ、ひ  
とことに、はなれかたきならひなれ」(4オ)ハ、いわうさんわ  
う(ふ)のけちえん(えん)もすてかたく、とうはうとよりよのわかれも、さ  
すかになこりお(お)かりけれハ、こ、ろハかりにあらまして、い  
たつらに月日をお(お)くりける、その、こ、ろのうちにくこき、こ  
とはのほかにあらわれけるにや、てう(こゝ)、ほ、ふうちんのそ  
こ、しつきやくしてハ、あやまつて三十年しやうす、いづれの  
日か、にんけん(えん)えいしよくのまなこ、ゆうせんと」(4ウ)して  
は、せんしゆかんうんにねふる。是ほとに、おもひたちぬるこ  
とのかなハぬハ、いかさま、しやま、け道の、我をさまたくる  
にや、さらは、ふつほさつのおうこをたのミて、このくハんを  
しやうしゆせん、とおもひて、いし山にまうてつ、一七日か  
間ハ、五たいを地になけて、一心にまことをいたして、たうし  
んけんこ、そくせうむしやうほたひ、とそいのりける。七日ま  
んしける夜、らいはんをまくらとして、」(5オ)すこしまとろ  
ミたる夢に、にしきのとちやうの内より、ようかんひれいなる  
ちこの、いハんかたなくらうたけたるか、たちいて、ちりま  
かへる花の木かけにやすらひたれハ、あをハかちにぬひ物した

るすいかんの、えん(えん)さんに、はなふたたひさきて、雪のことく  
にふりか、りたりけるを、袖につ、ミながら、いつちへゆくも  
もおほへぬに、くれゆくいろにきへて、みへすなりぬ、とみて、  
ゆめハさめぬ。」(5ウ)

〔絵 1〕(6オ)

これすなハち、しよくハんしやうしゆのむさうなりと、うれし  
くおほえて、また、しの、めもあけぬまに、たち(たち)返し(返し)、余所よ  
りきたるへきものをまつやうに、いまやたうしんをこりけり、  
とまちいたれハ、なを山ふかくすまハや、と思ひしこ、ろハ  
すれて、夢にみえたるちこのおもかけ、ときのほと(こゝ)、身をは  
な(な)・す。りつしも、まことのうつ、ならねハ、せんかたなきお  
もひにたへかねて、さて」(6ウ)もや、もしなくさむれ、一ろ  
のかうをたきてハ、仏せんにむかへハ、かんのりふしん、はん  
こんかうのけふりにむせひて身をこかし給ひし、ふていの御思  
ひも身にしられ、くらやまの花ほころひて、うんていによれば、  
ふ山のしんちよか、くもとなり雨となりしか、ゆめののちの(こゝ)  
もかけに、たつきもしらすなけき給ひけん、やうたいの御なみ  
たも、よそならず。さんわうのしんたくに、われ一人の」(7オ)  
しゆとをうしなふハ、三しやくのつるきを、さかさまにのむに  
ことならずと、かなしひ給ひしかハ、わかりさんを、いかさま  
に山王のおし(お)ミおほしめして、道心をさまたけさせ給ふにや、  
たとひ、さやうのしゆりよなり共、いのちいきてこそ、ほつと  
うのたいふうに、むかふ所をもさまたけんすれ、くれまつ程の  
露の身もあらし、今ハ、と思ひわひけるか、いし山のくハんお  
んをこそかこち申て、」(7ウ)さま(こゝ)、思ひて、又石やまへ

こそま<sup>(ま)</sup>いり<sup>(り)</sup>ける。三<sup>(三)</sup>の寺のまへをすきけるに、ふるともしらぬ  
春さめの、かほにほろく<sup>(く)</sup>とか、りけれハ、しハらくたちより  
ハれまをまたんとおもひて、こんたうのかたへ行ほとに、しや  
うこ院の御坊のにはに、おい木のはなの、いろことなるこそす、  
かきにあまりて、雲おしけり、はるかに人家をミれハ、はなあ  
れハすなハち入、といふ、しのこ、ろひき入られて、(8才)  
もんのかたハらにたちよりたれハ、よハひ二八ハかりなるちこ  
の、すい<sup>(すい)</sup>かん<sup>(かん)</sup>に、うすくれなひのあこめかさねて、こしのまハ  
り、ほけやかに、けまハしふかくたをやかなるか、人ありとも  
しらぬ<sup>(しらぬ)</sup>さまにや、ミすの内よりにはに立出て、ゆきおもけにさ  
きたる下えたひ<sup>(ひ)</sup>はなを手おりて、

ふる雨に ぬるともおらん やまさくら くものかへしの 風  
もこそふけ(8ウ)

と、うちなかめて、はなのしづくにたちぬれたるてい、これも  
はなかとあやまたれて、さそふかせもやあらんと、しつこ、ろ  
なけれハ、おほふハかりの袖もかなと、くもにもかすみにもか  
すへきこ、地なとしけるに、こ、ろなき風の、もんととひらを  
きりく<sup>(きり)</sup>とふきならしたるに、あくる人ありやとあやしミて、  
ミやりて、はなを手にもちなから、か、りのもとをめぐりて、  
はるかに(9才)あゆミけるに、みるふさのことくにて、ゆる  
く<sup>(く)</sup>とか、りたるかミのすち、やなきのいとにうちまとわれて、  
引と、めたるを、ほれく<sup>(く)</sup>とみかへりたるめつき、かほのにはほ  
ひ、ハかりなきさま、行急なく、我をまよハしつる夢のた、ち  
に、すこしもたかハぬハ、いまのうつ、に、みしよの夢ハうち  
わすれて、日くれけれとも、ゆくへきかたおも覚へす。(9ウ)

〔絵 2〕(10才・図1参照)

その夜ハ、こんたうのえん<sup>(えん)</sup>にひれふして、よもすから、なかも  
わひぬ。

是や夢 ありしやうつ、 わきかねて いづれにまよふ<sup>(まよふ)</sup> こ、  
ろなるらん

夜明れハ、また、きのふの所にゆきて、御坊<sup>(ごぼう)</sup>のかたハらにた、  
すミけるに、わらハの、いときよけなるか、ぬきすのしたのミ  
つすてんとて、もんの外まていてけり。是や、きのふのちこの  
わらハ(10ウ)なるらんとおもひて、立よりつ、ちどもの申  
候ハんといへハ、何事にて候やらんとて、事のほかなるけしき  
もなし。りつし、うれしくおもひて、きのふ、このみんけに、  
すいきよしやのすい<sup>(すい)</sup>かん<sup>(かん)</sup>めされて、御としのほと十六七八かり  
にミへさせ給ふ、おさあひ人の御事やしりまいら・せ給ふとと  
へハ、わらハうちゑミて、われこそ、その御かたにめしつかハ  
る、ものにて候へ、御なをハ、むめわかきミ(11才)と申候、  
御さとハ、はなその、大しん殿にて・わたり候、こ、ろわく  
かたなく、いつハリのあるよとたにも、おほしめされぬほと、  
御心あてにて候へハ、一寺のらうそう、しやくはい、はるにお  
くれたる一木のはなをミてハ、よそにちるこ、ろ・なくなり、  
秋の月のくまなきにハ、みな我いへのひかりをあらそふせひ  
にて候を、この御所のおんありさま、あまりに、ゆるすかたな  
くありしほとに、(11ウ)くハんけん、すかのむしろならてハ、  
御出もさふらハす、た、いつとなく、ふかきままとむかひては、  
詩をつくり、うたをよミ、なをさり、に、日をくらし夜をあ  
かせせ給ふ、とそかたりける。きくににつけても、いと、こ、

ろもうかれぬれハ、やかて、このわらハをたよりにて、つほの石ふみつてにても、こゝろのおくをしらせハやおもへ共、あまりにひたけたらんも、さすかなれハ、いしやまへ參(12才)りつ、また、わか山へ・かへりける。りつしハ、ゆめかうつ、かのおもかけに、おきもせずねもせて、なげきくらしおもひあかしけるか、しやうこゝろんの御ほうのへんに、むかしりたりしひとのあるをたつねいたして、あるときハ、しいかのくハいに事よせて、またあるときハ、しゆえんにけうしたるていにて、一夜二夜をあかす事、たひくになりけり。其後、(12ウ)さきのわらハをかたらひよせて、ちやをのミ、さけをた、へて、あそひけるついでに、こかねのうちえたのたちはなに、たき物をいれて、ねりぬき、からあや、ふせんれう、いろく、のこそて、十かさねおくりたり。わらハも、はや心さしのふかきいろをみて、よろつこゝろをへたてぬさまなりけり。さて、むめわかきミに思ひまよへる心のやミ、いつハるへしとおほへぬよしをかたり(13才)けれハ、まつ御文をあそはしたまハリ候へ、やかて申てミ候はん、とそ申ける。おもふこゝろをつくすほとのことのハ、いかにくろミすくるとも、ありかたけれハ、うたハかりにて、しらせハや ほのミし花の、をまかけに、たちそふくもの まよふこゝろを と、かきておくりけり。(13ウ)

〔絵 3〕(14才)

わらハ、ふミをふところより取いたして、是御らん候へとよ、いつそや、雨のたへまの花のかけにたちぬれて御わたり給ふ・を、ある人、ほのかにみまいらせて、人しれすおもひそめたる、そ

てのいろいろ、はやくれな井にふかくなりて、なくハかりにつ、ミかねたるやうにミへ候そや、とかたれハ、むめわかきミ、かほうちあかめて、ふミのひほをとかんとし給ひけるところに、(14ウ)しゆつせなる、なにかしのそうつとやらん云人の、ミすをか、けてうちへ入に、みせしとて、袖のうちにやしやくせハ、わらハ、ひんきあしと、ひまをまちて、日くるるまでしこうしたるに、しよゝんのまとより、御返事かきてたひたり。わらハ、てもかろくうれしくて、いそきもつて行たるに、りつし、めもあやによるこひて、まことに、身もあらぬさまのいなり。ひらきてミ(15才)れハ、是も、ことハ、なくして、たまつさに、たのますよ 人のこゝろの はな・いろいろ あたなる雲の か、るまよひハ(15ウ)

〔絵 4〕(16才)

りつし、この返事をみて、心いと、うかれしかは、さらにたちかへるへきこゝろもせず。あひミぬさきのわかれたにも、せんかたなくおほへしかハ、しハし、あたりのやとになをもと、まり、よそなから、そなたの木すゑをもミつ、くらさハやとハおもへ共、あまりにそれも、日だけたれハ、又こそまいり候ハめ、うれしくも、かよふこゝろのしるへとならせ給ひぬるものかなと、わらハに(16ウ)いとまこひつ、りつし、やまへ返りけるか、一あしあゆみてハみかへり、二あしゆきてハたちと、まりしけるほとに、はるの日なかしといへとも、ほとちかき、さかもとのさとはうまで、ゆきつかて日くれにけれハ、とつのへんにありける、ハにふのこやにそと、まりける。よもすから、おもひあかして、あしたになれハ、やまへのほらんとて、には

まていてたれとも、ちひきのなハをこしに」(17才)つけたるか  
ことく、われならぬ心にひきと、められけれハ、とつより又引  
かへして、大津のかたへそあくかれゆく。雨、しめやかにふり  
けれハ、ミのかさうちきて、たひ人のすかたに身をやつしつ、  
ゆくところ・、からかさしかけたる馬のりの、みちにてゆき  
あひたり。たれなるらんとミやり・、けれハ、むめわかきミの  
中たち・、わらハにてそありける。りつしをミて、あなふしき  
や、」(17ウ)申へき事ありて、しらぬ山までもたつねまいらん  
とおもひつるに、うれしくまいりあひたるものかなとて、むま  
よりとひおりて、りつしか手とりて、かたハらなるつしたう  
へそたちよりける。さて、なに事にかとへハ、わらハ、ふと  
ころより、いろことにこかれたる、もミちかさねのうすやうの、  
ふれけるてさへくゆるハかりなるふミを取いたして、いかなる  
山にミちまよふとも、き、」(18才)しハかりをしるへにてたつ  
ねてまいれ、とおほせさふらひつる、けしからず・御こ、ろま  
よひそや、まして、一夜の後の御そてのうへ、さこそハ露のた  
ハふれ、とうちわらへハ、りつしも、せめてわかれをなげく身  
とならて、とたハふれかよハして、ふミをミれハ、いつハりの  
あるよとしらて ちきりけん わかこ、ろさへ うらめしのミ  
や」(18ウ)

〔絵 5〕(19才・図2参照)

御所のかたハらに、しりたるしゆとののはうの候へハ、それにし  
ハらく御さ候て、御すたれのひまおも御こ、ろにかけられ候へ  
かすと、わらハ、しきりにいさなへハ、おもふかたにこ、ろひ  
かれて、りつし、又、三井寺にゆきぬ。わらハ、しハしのほと

のやとかりて、あるハうのかくもんしよにおきけれハ、そのは  
うすも、ねんころなるたまに、てう三ほ四のいとなひなどあり  
て、つねにハ、ちこともを」(19ウ)あまたいたして、くハんけ  
んをし、ほうへんの哥あハせなとして、日をおくりける。りつ  
しハ、しよくハんの事ありて、しんら大明神に、一七日のさん  
ろうするよしをいひて、夜るになれハ、みんけのかたハらに立  
まされて、つき山のまつのかかけ、せんさいのくさのそこにか  
くれてゐたるに、ちことも、はやこ、ろへたるけしきにて、ひと  
めもかなと、なかめたるやうなれとも、かなハて、いて」(20才)  
かねたるこ、ろつくし、みるも中くくくるしけれハ、よしや、  
た、ミてなからみるハかりを、わか身にあるちきりにて、人の  
なさをこそいのちにせめ、とおもへハ、あしたゆく行てはか  
へり、かへりてハゆき、よなく、日数十日あまりにもなりに  
ける。いつまでも、と人ハいへとも、なか井せん事もさすかな  
れハ、明日は我やまへかへりなん、とおもひける所に、わらハ  
きたりて、こよひころ、あの御所へ、きやう」(20ウ)より、き  
やく人御いり候て、御しゆえんにて候つるに、もんしゆも、い  
たく御えひ候へハ、ふけすくるまでかへられてしこうせられよ、  
これへ、しのひやかに御いりあるへし、と仰られ候ひつるに、  
もんさ、て、かならず御まちあるへしと、いそ・しけにいひす  
て、かへりけり。」(21才)

〔絵 6〕(21ウ)

りつし是を聞て、こ、ろうかれ、たましひみたれて、いつくに  
ある我身ともおほへす、ふけゆくかねのつくくと、月のにし  
にめくるまでまかかねたるところに、からかきのとを、人のあ



くるをとつるに、しよゐんのすきしやうしより、はるかにみ出したるに、れいのわらハさきにたちて、きよなふのちやうちんにほたるを入てともしたり。そのひかり、かすかなるに、このちこ、きんしやのすい」(22オ)かん、なよやかにうちしほれたるていにて、みる人もやと、かゝりのもとにやすらひたれハ、みたれてかゝる、あをやきの、いと、いふハかりなきさまにみえたるに、りつし、いつしかこゝろたよくしくて、ある身とおほへす。わらハ、ちやうちんをささうののきにかけて、しよゐんのとをほとくとたきて、是に御わたり候やらん、とあんないすれハ、りつし、いふへきかたをもしら」(22ウ)て、ちと、かたハらに身をそハむるけしきにて、あるよしをそしらせける。わらハ、又ハにたちかへり、はや、御いり候へ、と申せハ、ちこハ、さきたつてつまとをならず」(23オ)

〔絵 7〕(23ウ)

その袖のうつりかも、みにふる、ハかりよりそひて、うちかたふきたれハ、せんけんたる秋のせみのハつもとゑひ、えんてんたるかいのまゆすみのほひ、ハなにもねたまれ、月にもそねまれぬへき、も、のかほはせ、ち、のこひ、ゑにかくとも、ふてもおよひかたし。かたるにことハなかるへし。なみたと、もに、まくらをかハしまの、ミつのなかれもたへす、なをちきるへきむつことも、また月なくも、ねや」(24オ)さむくして、らんふうの夢さめやすく、れんりの花わかれてと、めかたけれハ、しの、をさゝの一ふしに、あけぬとつくるとりのねもうらめしく、をのかきぬくひや、かになりて、たちわかれなとするに、明かたのつきの、まとのにしよりくまなくもさしいれた

れハ、ねもみたれかミのはうくとか、りたるハつれより、まゆのほひほけやかに、ほのかなるかほの、おもへるいろふかく」(24ウ)みゆるさま、わかれてのちのをもかけに、又あふまてをまつほといのちあるへしと。おほへす。りつしハちこをおくりて、あかつき出たりつるまゝにて、いまたうちへもいりえず、もんのからいしきのうへにたちかねてゐたる所に、わらハきたりて、御ふミとてさしいたり。あけてミれハ、さしもおほからず、

わか袖に やとしやはてん」(25オ)きぬくの なみたに わけし あり明の月

りつし、しよゐんにかへりて、

ともにみし 月をなこりの そてのつゆ はらハていく夜 なけきあかさん」(25ウ)

〔絵 8〕(26オ)

りつしハ、夢うつ、かたたにもおもひもわかさりつるおもかけを身にふれ、そへつるそてのうつりかを、わかものからかたみにて、山へ返りたれとも、こゝろしほれ、たましゐうかれて、よろつの人ものいふことも返事もせず、なくとしもおほへぬなみた、ひとめにあまりて、おさふへきそても、くちハてぬへけれハ、ちといたハることあり、とひろふして、人にたいめんもせず、」(26ウ)ふししつミてそ日をおくりける。わらハ、このよしをつたへきゝて、むめわか君にかくとかたり申けれハ、わかきミも、まことにおほつかなく、こゝろくるしき事におもひくすおれて、御けしき、つねよりもうちしほれ給ひぬ。いままやおとつれあると、しわしは、こゝろにこめてまち給ひける

か、あまりに日かすふりけれハ、わらハをよひよせ・(27オ)に、さても、ありしよのゆめの、た、ちも、うつ、なくなき(27オ)に、おとろかすたよりもなくて程へぬれハ、たかかたのつらさになしてハ、そのま、に、やかてとをさかるへき、風のこ、ちとやらん、(2)聞へしかハ、露のいのちも、いか、なり候らん、もしはかなくなりなハ、なからん跡をとひてもそのかひなし、いかならん山のおくなりともたつねゆかハや、と思へとも、申おく事なくてまかりなハ、もんしゆの御こ、ろも、さこそとおもハれて、それもかなハ(27ウ)す、行衛もしらぬあた人の、た、いひすてしことのはを、まことかほにてわれにこ、ろをつけしも、たかせしわざそや、いまのほにも、われをしるへして、いかなるとらふすのへ、くしらのよるうらなりともたつねてゆく、とかこちの給へハ、さすか・(2)またいとけなきあたしこ、ろにて、又なく人におもひつきぬるハ、わする、わざもなきならひなれハ、けにことハリやと、わらハおもひしり(28オ)て、そのひとのあり所をハ、くハしくうけたまハリ・候へハ、御とも申候はん、御所のきよい、あしく候ハ、のちに何とも申させ給ひ候へとて、ちことわらハとた、二人、ゆくへきかたをもしらす、たちいてにけり。君ハもとよりも、三たいきうきよくのいゑにむまれて、かうしや、しつはの中ならてハ、かりにも、いまた、ていとをあゆミ給ふ事なけれハ、こ、にやすミ、かしこにたちと、まり、(28ウ)さらに、あゆミかねさせ給ひけり。わらハ、あまりのいたハしさに、あハれ、てんく、はけものなりとも、我らをととりて、ひゑの山へのほり候へかし、といひて、からさきの松の木かけにてやすミゐたるところに、年のいとた

けたる山ふしの、四方こしにのりたりけるか、こしをまへにかきすへさせて、是ハ、いつくよりいつちへ御わたり候やらん、といひけれハ、わらハ、有のま、にこたへける。山(29オ)ふし、こしよりおりて、われこそ、御たつね候はうのとなりへ、まかりのほるものにて候へ、あまり・(2)御いたハしくみまいらせたる程に、われハかちにてあゆみ申さん、このこしにめせ・(2)とて、ちことわらハをかきのせて、りきしや十二人、とりの(29ウ)とふかごとくにゆきけるか(30オ)

(絵 9・a) (30ウ)  
(絵 9・b) (31オ)

はうくたるこすいのうへ、まんくたる雲かすミの中をわけて、へんしのあひたに、大ミねの、しやかのたけといふところへそ、かきもて行にけり。こ、に、はんしやくをた、へたる石のらうの中に、おしこめられておきたれハ、月日のひかりもいへす、夜ひるのさかひもなし。たうそくなんによ、そのかすありとおほへて、た、なくこゑのみそ聞へける。(31ウ)

#### 付記

貴重な資料の閲覧・翻刻を許可して下さったソウル大学校中央図書館に、この場を借りて深謝申し上げます。

(うちだ やすし 漢陽大学)



<図1 [絵2]>



<図2 [絵5]>